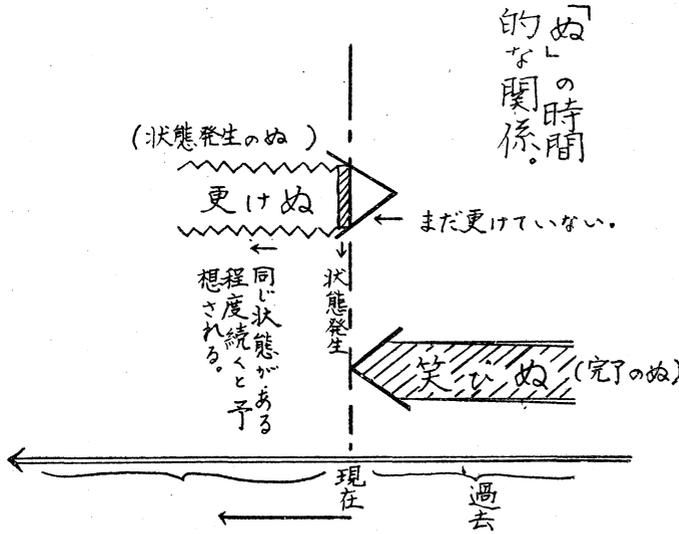


性質の一面として考えた方がより正しいのではないだろうか。

一 入道、内府に申違うては悪しからなん（キツト悪カロウ）とや思はれけん（平家）



二 今年の軍には違なく勝ちぬ（キツト勝ツ）と覚ゆるぞ（平家）  
等の用法のある事も一考しておく必要がある。

## 接頭語と接頭辞の一考察

三年 福山 布威

従来、接頭語、接尾語と言われるものの中には、意味上又は現在の言語意識等から考えて、語と呼ぶにふさわしくない種類のものがある。それを接頭辞、接尾辞として接頭語、接尾語と区別する説に基いて、一応の考えをまとめてみたいと思う。ここでは紙面が限られているので、接頭語、接頭辞の方のみを取り上げることにする。

例えば、接頭語と言われているものの中には、「御迷惑」「おみ足」「ご霧」「小暗い」「打ち興じる」「立ち勝る」「ぶつ倒れる」「こころさい」「か細い」「み空」等の種類の語と、「お寺」「さまよう」「おみき」「たなびく」「御飯」「令息」「す足」「生糸」「まつすぐ」「まつか」「小川」等の種類の語とを、現在の言語主体の意識によつて分けることが出来る。前者は「御」「おみ」「ご」等が

附いたからといつてその下の語本来の意味には変りはなく、「迷惑」「足」「霧」に「御」「おみ」「さ」等の接頭語が附いたものと考えられる。後者は接頭語という觀念から一応離れた、又は離れつゝあるもので、言語主体の主観によれば、もはや二回過程を経た語としてではなく、単なる一語として意識されていると考えられる。

「御迷惑」の「御」と云うのは単に丁寧な意味を添えているに過ぎず、現に「迷惑」という語を一語として同じ意味に用いているのである。「打ち興じる」にしても、「打ち」と云うのはその本来の意味から離れて、単に「興じる」の意味を強めているのであつて、「興じる」と「打ち興じる」とは同じ意味に用いられる。このように、同じ「はな」を指して云つた場合でも、「つばきのはな」と云えば語としての認識が變つてくるように、「打ち興じる」は「興じる」と同意義に用いられながら、「打ち」を接頭語と認めて、二回過程を経た語と意識している。故に接頭語として品詞分類の対象となるわけである。

しかし、同じ「御」でも「御迷惑」と「御飯」と云つた場合、そこに働く言語意識は變つてくる。現在では通時的意識はなく、共時意識によつて「ごはん」を一語としている。故に、「はん」のみで「米を煮たところの我々の主食」と云う概念をなさない。同じことは「令息」の場合も云えるのであるが、「お寺」の場合はそれほどはっきりした段

階まで到つていない。「さまよう」の場合は、「まよう」としても一語として通じる訳ではあるが、それと少し意味が變つて「彷徨する」と云う意の一語として意識しており、同じことは「たなびく」の場合も云える。又、同じ「打ち」でも「打ち明ける」と云えば、それで一語として単なる「明ける」とは違つた意味を表すのであつて、以上のものは接頭辞とすべきである。

すると、「打ち」は本来動詞であり、非独立要素としての接辞というには当たらないとも考えられるが、これは動詞「打つ」の意味「たたく」からは離れ、やゝ独立要素(意味)を失つて、下の語と共に一語を構成しているのであつて、それでよいのである。故に、動詞でも接頭語でもなく、一単語の構成要素であるところの接頭辞なのである。「ひきつぐ」という語も同じであるが、但し「ひきつける」と云つて「手許へ引き寄せる」の意に用いた場合には、「ひき」も「つける」もそれぞれ自己の意味を保存しつゝ、新しい単語「ひきつける」を作つているのであるから、この場合複合語と見るべきである。しかし、同じ「ひきつける」でも「こじつける」とか「魅惑する」の意味に用いられた場合の「ひき」は接頭辞となるわけである。

「不賛成」「不器用」等の「不」も、現在の言語意識では接頭語的な觀念もないが、比較的具体的な意味を添え、切り離せば全然意味が變つて来る故に接頭辞と認

めるべきである。又、「総選挙」「全日本」等の「総」「全」というのがあるが、これらは「全体」「全きこと」と云う意味を有する名詞と認められるから、「総選挙」「全日本」は複合語とすべきだと思ふのである。

以上の様に、強め、丁寧、音調等の抽象的意味で附けられ、下にある単語のものと意味に変化をきたさないものを接頭語として品詞分類の対象にし、一方、接頭語よりも比較的具体的な意味を添え、下の語と合して、それが単独で表しえない意味を表し、品詞分類の対象とならないものを接頭辞とする。又、二つ以上の単語がもつと具体的な本来の意味を互に保存しつつ新しい意味を有する一単語を構成したものを複合語と認める。しかし、厳密にはこれらの區別はしにくく、その時に於ける言語主体の意識（一語と意識しているかいないか）によるのである。「その時」と云うのは、広くその一時代（例えば現代に於ける言語意識）の意味もあるが、前述の「ひきつける」の例の如く、その言語を使用したその場合と云う狭い意味をも有するのである。

— 以上 —

## 有間皇子の萬葉歌

三年 池 沢 美 保 子

岩 下 禎 子

姫 嶋 多 賀 子

『萬葉集』に有間皇子の作として次の二首が伝つてゐる。

① 磐白乃浜松之枝乎引結真幸有者亦還見武 (卷二、二四)

② 家有者寄爾盛飯乎草枕旅爾之有者椎之葉爾盛 (卷二、二四)

これらの歌がどんな動機から生れ、又いかなる社会状勢が、この歌の背景にあつたかと云う事は古来諸家の説くところであるが、私達は『日本書記』の記事より、これを推察していき、①の歌の解釈に役立てたい。

有間皇子は才36代孝徳天皇の皇子である。有間皇子をとりまく主な人物を系図に示すと次の如くなる。

